

## 海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑤)

高島 敬明

最高責任者であるエンジニアリング会社のYプロジェクトマネージャー(プロマネ)は、統率力があり仕事に精通しているだけでなく、日本人には珍しくお酒が並外れて強い人でした。私もパーティーに時々出ることがありましたが、ソ連の宴会は初めからウォッカでの乾杯になります。

延々と「ウラー」(万歳の意)が続くわけですが、注がれたウォッカは必ず飲み干さねばなりません。中国でも白酒を「乾杯乾杯」と言いながら飲み干す習慣があるようですがそれと同じです。

また、習慣でしょうが必ず乾杯の音頭を取る人から、たわいのない「小話」が話され、それが終わると「ウラー」となるわけです。ある小話を通訳が訳すには例えば次のような話です。〈ある村に遠洋航海に出ている船員の綺麗な奥さんがいました。どんどん太って参りました。ある日病院に行きました。すると、スマートな奥様になって帰ってきました。この奥さんに乾杯しましょう〉となるのです。要は出産して退院したということですがどのような事情があったのかはみなさん想像してください。お返しに日本人も小話を返すのです

が、少し面白い話の方が好まれるのでプロマネは、桃太郎の一節を話したりしましたがとにかく苦勞されていました。

このような飲み会が続くのですが、わがYプロマネは食べるものが少ない中、最後まで乱れませんでした。Yプロマネの話では、フランスのプロマネはお酒が弱いらしく海運省の係官はこのプロマネはだめだ、だめだと話すばかりで要求事にもなかなかサインをしなかったとのことでした。

お酒の話のついでですが、お酒の好きなソ連人はアルコール中毒が多くなり、フルシチョフ首相(1894～1971年)になってからウォッカは、100g、200gと量り売りになりました。我々は食堂でウォッカを瓶で購入できましたのでよく頼まれました。「息子が大学から帰ってくるので、ガスバージン高島(高島様の意味)!ウォッカを瓶で買ってもらえないか」とか「大きいハムソーセージを〇〇キログラム買って欲しい」という具合に。

さて、こちらに来て1か月くらい経ち、5月に入りました。1日はメーデーなので休日ですが、仕事の段取り次第では出勤もありうると思っていました。幸いまだ本格的に忙しくなる前でしたので休みとなり、全員でバスに乗って町の中央のメーデー広場に行きました。

バスはブルガリア製で立派で綺麗でした。広場には第二次世界大戦の戦車とか魚雷艇が7～8メートル位の高さの台に飾ってあり、そのあたりをただみんなで歩くだけのお祭りでした。人々は手にバラの花を持ち、小綺麗な服を着ての行進です。屋台も出ておらず、ただぶらぶらするだけでしたが本当に皆さん楽しそうでした。バラの花は、兵士が直立不動で警護している何の記念碑か分か



現場の監督の写真。左から計装の監督、中央がサブマネNo.2、右が筆者。



フランスの会社「Uie社」の作業員の宿舎兼機材運搬用台船。3隻ほど見かけた。(1978. 5)



据付(鳶たち)の主力メンバー。(1978. 7)

りませんが、その前に添えるのです。

メーデーも終わり少し経った頃、栈橋工事が一部完了したのでフランス側から我々に引き渡しがありました。人間関係はできていましたので比較的スムーズにいきましたが、引き渡しの会議は大変でした。例によってロシア語、フランス語、英語、日本語と話されていきますので時間がかかります。またこちらから返すのですが、またしばらくかかると言った具合です。

引き渡しがようやく終了し、数字を確認しながらお互いに立会いの下で測量に入りました。送油管の底の部分の部分を起点とし、順次高さを決めていくのですが、日本から持って行った測量機器が珍しいのか人だかりができて仕事になりません。ソ連に置いていくつもりで持参したトランシット(角

度)とレベル(高さ)の測量機器、墨ツボ、墨の付いた糸でピンとはねて地面に直線を引く昔ながらの道具、曲尺等々、これらが非常に珍しかったようでした。

そこは、現場事務所から見るところなので、見兼ねて女性の通訳が飛んできましたが、華奢で上品な通訳が「そこをどいてください」と話しても作業員たちはいなくなるどころか逆に増えていく始末。やはり男の現場には上品な女性通訳では埒が明かないことが分かりました。Yプロマネも頭を抱えてしまいました。今さら日本から男の通訳を呼べるすべもなく、プロマネは私に「だめでもともと、ソ連の海運省に通訳のお願いをすることにします」と話されました。

ソ連側の通訳では内部情報が漏れることを心配し我慢していたのですが、背に腹は替えられなくなってしまいました。これまでは海運省側から現場に指示が来たときは、港湾の専属電話で事務所に電話して女性通訳に「何と指示しているか聞いてくれ」と依頼すると、ソ連人に電話を替わって聞いてもらい、通訳から「〇〇と言っているそうです」と返事をもらいながら、細々と測量を続けていました。一事が万事こんな調子でした。

一週間くらい経ってから「高島さん、仕事が終わったら、ブリガンチーナホテルの私の部屋に来てください」とYプロマネから電話がありました。急遽ロシア人のドライバーを確保し、何があったのかとホテルに急ぎました。渋滞をすり抜けながらホテルに着きましたが、車の中で今日は海運省から派遣される通訳の引き合わせだろうと薄々考えていました。

ホテルの玄関は、会社のネーム入りの制服を着用していらしたのでフリーパスです。中に入ってエレベーター前に立つと、蛇腹式のおめかしいものでしたがそれに飛び乗り5階のYプロマネの部屋に急ぎました。

私を見たプロマネは、「高島さん、急で申し訳ない。海運省から昼過ぎに話がありました。通訳が夕方にはホテルに来るそうです。60歳を過ぎた寺島さんという方です。是非一緒に会ってほしいのです。もうロビーに来ていると思うのでお連れしてもらえますか?」と急いで言われました。

全く予期していなかった日本人の通訳でした。早速ロビーに降りて探しに行きました。ロビーはただっ広く片隅の観葉植物の陰に4人掛けの小さなテーブルと椅子があるだけです。人影の少ない中、それらしき人は観葉植物の陰に隠れるようにして座っていました。小柄な人で中肉で色は黒く、古いロイド眼鏡を掛けた人でした。控えめに両膝をそろえ、その上に手の拳をきちんと乗せ、背筋を伸ばし、植物の陰に静かに座っておられました。

「寺島さんですか?」と声をかけると、

「寺島です。Yマネージャーを訪ねるよう指示されました」

「高島です。Yマネージャーがお待ちしていますのでご案内します」

「わかりました」

そうして案内しましたが、どこまでも丁寧に控えめな紳士で戦前の日本人を見る思いでした。これが通訳の寺島儀蔵氏との最初の出会いで、強烈な印象を受けました。1978年(昭和53年)のことでした。本稿の最後に「寺島儀蔵」氏について紹

介をしておきます。一定の年齢以上の方は、ご存知の方もいらっしゃるでしょうが、歴史上の人物と言っても過言ではないと思います。(続く)

### ■寺島儀蔵(1909～2001年)



北海道・根室の生まれ。戦前の共産党員で日本国内でも6年もの間監獄に入れられた。26歳の時、ロシア革命の理想を信じ樺太からソ連に入ったが、スターリン(1878～1953年)体制下のモ

スクワで逮捕され、スパイ容疑をかけられ死刑判決を受けた。すぐ25年の懲役に減刑されたが、各地の監獄(ラーゲリ)に廻され重労働を強いられた。そしてスターリン死後2年余りの1955年に釈放された。この時すでに46歳。

その後様々な苦労を重ねながらロシアで生き抜き、晩年を暮らした黒海沿岸の町、トアプセ(グラスノダール地方の港湾都市)で2001年に亡くなった。日本への望郷の念は人一倍強く、念願かなって日本に一時帰国した時は1993年、83歳の時であった。「長い旅の記録」という、樺太からソ連に入るところから書き始めた本を出版しており、これを読むと彼は誠実で気持ちの穏やかな人と思われる。決して共産主義に凝り固まったタイプではないことが伺える。どんな時でも日本人としての誇りを持ち、年を取ってからも日本語の勉強を忘れなかった。

晩年はロシアで事業する日本の会社の通訳を始め、経済的にも恵まれる様になった。ラーゲリで知り合ったウクライナ出身の女性、ナージャと知り合い、後に結婚し彼女の連れ子も育てている。彼女はちょっとしたことで17歳の時捕まり、5年もの間監獄に入れられた。厳冬の中、収容所まで歩いて行かされたことで凍傷となり手の指を3本も失った。絶望の中にいる彼女を励ましたのが儀蔵で、そのあと彼女が先に出獄し別れ別れになったが、彼の釈放後ふとしたきっかけで再会することが出来、結婚に至った。



寺島氏の著書、(右)「長い旅の記録」日本経済新聞社(1993)。(左)「続・長い旅の記録」中公新書(1996)